

寄稿

動物と音楽が 心のバリアを取り除く

北海道札幌市北区

トリプルアイ代表 岩井由利子

2008年11月、盲導犬の社会的な重要性はもとより動物の素晴らしさを経験したボランティアの有志が「盲導犬がいる当たり前前の社会の実現」を目指し、当会を発足させました。メンバーに音楽関係者がいたことから「音楽と動物は障がい者と健常者の心のバリアを取り除く」を活動理念としました。音楽を聴いている時や動物と触れ合っている時、人は心が癒され優しい気持ちになります。この点に着目し啓蒙活動は演奏会と盲導犬とのコラボイベントとすることにしました。将来的に聴導犬や介助犬に活動領域を広げることを見据えました。

発足時から2019年までのイベントは、①演奏会（ピアノ、バイオリン、オーボエ等によるコンサート）②公益財団法人北海道盲導犬協会による講習会及びPR犬（正規の訓練を受けた犬）との触れ合い・アイマスクを着用した体験歩行などでした。主な開催場所は公共スペース・ホテル・レストラン・商業施設内のステージ・病院のロビーなどで年間5〜6回、集客数は各回100〜200人を数えました。それ以外のイベントも合わせると、延べ1万人の方々に盲導犬のことを周知したことになります。

来場者からは生演奏によるリラックスした雰囲気の中、盲導犬の必要性や街で見かけた時の適切な接し方を理解できたといった声が



生演奏で雰囲気をリラックス

寄せられました。盲導犬の賢さだけでなく、健気さや可愛らしさが印象に残ったという感想も毎回、寄せられました。音楽と盲導犬を身近に感じることで優しい心が醸成され、障がい者と健常者の心のバリアが取り除かれるという理念が間違っていないことを実感しました。コロナ禍による中断後、再開した2022年からは感染対策に配慮し企業や団体を対象にした出前講座が活動の中心になっています。1回当たりの参加者は50人前後と

従来のイベントに比べ少人数ながら、満足度100%という成果を上げています。

「きみと一緒にいけないところがある」

2020年に放送されていた公益財団法人日本盲導犬協会の広告です。その中で盲導犬ユーザーの約6割が受け入れ拒否を経験している」と報じていました。また今年3月の認定NPO法人全国盲導犬施設連合会の調査によると、不特定多数の人が利用する施設や交通機関などで盲導犬同伴の受け入れ拒否があった人が48%にのびりました。身体障害者補助



実際の盲導犬とユーザーによる講義（地域の小さな音楽サロン）

犬法（2002年施行、2008年改正）、改正障害者差別解消法（2024年施行）にもかかわらず補助犬（盲導犬・介助犬・聴導犬）への理解が進んでいるとはいえません。適切な受け入れと接遇に関する啓蒙強化が当会の最優先課題です。

東日本震災（2011年）に際し、地域住民が協力し視覚障がい者を安全に避難誘導し、東北地方で活躍中の盲導犬30頭は全て無事でした。このことは人に優しい地域づくりの一面を示しています。盲導犬はストレスが大きく寿命が短いと思われがちですがこれは誤解です。実際、同じ犬種との比較で2〜3歳は長生きすることをデータが示しています。ユーザーのもとで仕事をすることに喜びを感じる犬が盲導犬になります。毎日を大好きなユーザーと過ごし、ストレスのない生活を送っているのです。補助犬法はユーザーに公衆衛生上の管理責任を課しており、盲導犬は行き届いた手入れを受けます。そして引退後は北海道の場合、「老犬ホーム」という施設やボランティアの家庭で幸せな余生を送ります。生涯にわたる心身両面での万全のケアが長寿命につながります。盲導犬は同情の対象ではなく、アニマルウェルフェア（動物福祉）の観点からも推奨される存在です。当会では昨年7月、「地域の小さな音楽サロン」を開設し、ここを拠点に開催する講座でも盲導犬の

啓蒙と動物福祉の重要性を取り入れていきます。人にも動物にも優しい地域づくりへ寄与できれば幸いです。

当会がこれまで強調してきた主な点を列挙します。

①盲導犬に特別扱いは必要なく自然な受け入れ（好意的な無視）が原則である。ただユーザーが困っている場合には最小限のサポートが必要である。数年前、駅ホームから転落し盲導犬ユーザーが亡くなるという痛ましい事故が発生した。ホームドアの設置というハード面の不備が主張されがちだが、声かけなど周囲のちょっとした配慮があれば防ぐことができたかもしれない。

②1頭の盲導犬を育成するのに300万円を要する。候補として生まれてきた子犬のうち盲導犬になることができるのは2〜3割に過ぎない。人の命を預かる盲導犬になるのは狭き門である。貴重な盲導犬は、ユーザーには無償で貸与される。経済的理由で盲導犬の使用を諦めることがないようにとの配慮からである。

③補助犬法や障害者差別解消法への正しい理解が課題である。

これまでに当会が培ったノウハウや情報を発信し「補助犬がいる当たり前の社会」が到来することを目標に今後とも活動を続けていく所存です。